

【用語】あはれむ—哀れむ、いたわしいこと 生業—生活のための仕事、なりわい あまさへ—あまつさえ、その上に いつくしみ—慈しみ、愛する、かわいがる 公儀—幕府 たつき—たずき、生活の手段、生計 ひかこと—間違ったこと

【解説】天和元年（一六八一）沼田藩主真田信利の改易により、利根・吾妻地域はしばらく幕府の代官支配がつづいた。その後、本多氏や黒田氏が入部して沼田藩は再興されたが、寛保二年（一七四二）老中の土岐頼稔が三万五〇〇〇石で入封してからは、土岐氏の藩政が明治維新までつづいた。この間、関東農村は寛保二年の大洪水や天明三年（一七八三）の浅間山大噴火による凶作など、たび重なる災害や飢饉で荒廃した。この疲弊と困窮状況のなか、農村では自らの生活を確保するため、墮胎や圧殺（間引き）が流行するようになり、全国的な風潮となった。この悪風に対し、幕府や諸藩は農村労働力を維持するため、さまざまな対策を講じた。

この文書は、沼田領内でもこの悪風が流行しつつあることを憂えた八代藩主の土岐頼潤が、文政元年（一八一八）自ら記した間引き防止の教戒書である。このなかで、間引きは鳥や獣にも劣る行為であると戒め、今後、誕生してくる子供は藩が養育対策を打ち出すから心配しないよう指示している。これによって沼田藩では新たに養育方役所を設置し、その下に九人の養育大世話人を置いて小児養育政策を実施することになった。